

研究課題	青年期の自我同一性形成の混乱とその回復過程に関する臨床心理学的研究
研究代表者	戸島 宇一郎 (人間学研究科博士後期課程福祉・臨床心理学専攻)

I 研究の目的

社会恐怖や対人恐怖については、赤面恐怖がわが国独特の心性に関連したこともあって、以前から関心が高い。彼らにとって周囲他者の存在は恐怖の対象となっているが、実際彼らにとって周囲他者はどのように映り、どのように対処しているのだろうか。

筆者は、長年教師生活を送り、そこで生徒の心理相談にも従事してきた。その中で、教師として指導してきた気になる生徒や相談で出会った生徒たちのその後を追跡調査することを思い立った。調査面接は半構造化されていたが、極力彼らが自由に語ることができるように配慮した。今回は、特に対人恐怖心性を強く持っていた生徒ふたりを取り上げ、その発症と回復過程について、彼らの語りから検討した。尚、調査面接の実施および論文執筆に当たっては倫理上の配慮に細心の注意をはらった。

II 研究の経過

調査面接の実施 対象は筆者が高校・大学で相談にあたってきた生徒の中で、対人不安3事例、摂食障害2事例、強迫性障害2事例、統合失調1事例、躁うつ病1事例、PTSD1事例、虐められ体験・対人関係のトラブルから不登校・リストカット・オーヴァードース・抜毛などの行為をおこなった5事例、アイデンティティの障害2事例を取り上げ、調査面接を各々1回ないし複数回実施した。

文献研究をおこなった。

研究ゼミでの検討 この内容に関する検討をゼミの指導教授の小林先生および小林ゼミの院生と共に1年間行った。

2010年度日本学校教育相談学会で中間発表をおこなった。

論文執筆 指導教授の下に、第一報として、「社会不安障害」と「自己臭体験」の2事例の比較検討をテーマにして論文執筆中。

2011年度学会で発表予定。

III 研究の成果

1 先行研究

我が国では、対人恐怖の研究が1930年代から森田正馬らによって積み重ねられてきた。森田によると神経質はヒポコンドリー性基調の上に発症するとされ、ヒポコンドリー性基調は人間の本質的な感情であるという。そしてその恐怖の感情は意識されるとより強く意識される精神交互作用という精神の働きで強まり、神経症状が現れるとされる。1960,70年代になると注目されるべき対人恐怖の2つの研究の流れが見られた。1つは土居健郎の「甘え」の研究であり、もう1つは、いわゆる「重症対人恐怖」の研究である。後者の研究の代表に笠原嘉らの「重症対人恐怖」、山下格の「対人恐怖定型例(確信型対人恐怖)」そして植元行男、村上晴彦らの「思春期妄想症」があげられる。村上らは思春期妄想症の確信を支える3つの体験的契機として①関係妄想(「人が鼻をつまむ」といった他人の仕種から確信する)、②歪曲的知覚(「自分でも臭う」といった思いこみとも言える確信)、③体感異常(「肛門の辺がベタベタしている」といった身体欠陥の確信)をあげる。さらに「他人に不快な感じを与えている」、「忌避されている」、「状況依存的」、「中学・高校時代に発症」なども指摘される共通性である。1980年にアメリカ精神医学会によるDSM-IIIにおいて「社会恐怖」が疾患として記載され、1994年にDSM-IVで不安障害の下位項目として「社会不安障害」が位置づけられると、社会不安障害と我が国で従来から研究されてきた対人恐怖との関係が問題となり、今も関心を集めている。DSM-IVの付録に文化結合症として対人恐怖症が扱われるに至っている。今日、DSM-IVの「社会(交)不安障害」と山下の「緊張型対人恐怖」、笠原の第一群・第二群はほぼ対応しているという説が有力になりつつあるが、「重症対人恐怖」、「対人恐怖定型例(確信型対人恐怖)」に関しては議論が大きいと

ころである。本稿で扱う2症例は、この「社会（交）不安障害」と「重症対人恐怖」の事例に該当する。症状発症後の状況を当事者の視点から具体的に論じた臨床的研究は未だ少なく、本稿はその試みの1つとなることをめざすものである。

2 症例

対象は高校時代に社会（交）恐怖（A子）と自己臭（B男）で発症した生徒2人である。

症例1の概略 社会（交）恐怖のA子

1) 性別・年齢、A子と筆者との関係

女性、調査面接時の年齢25歳、筆者との関係は、高校時代、筆者が担任をし、随時生活全般の相談を行っていた。大学入学後、学生相談室を訪れ（19歳）、卒業までの4年間毎週1回、カウンセリングに通ったと言う。筆者がA子の調査面接をしたのはA子が大学を卒業し就職して1年目（2009.12.9～2010.4.10までの4回）のときで、その時はすでに症状はほぼ消失していた。

2) 家族、生育歴

父、母、本人（1人っ子）の3人家族。母親とは幼い頃から仲良く何でも話し、大学に入るまで友だちよりも母親と一緒にいることが多かった。友だちは少なく、自分の性格は根が暗いと言う。筆者が感じるA子の性格は、几帳面・真面目で素直、自分でやろうとする姿勢があり努力家、悲観的な見方が多く劣等感が強いことである。

3) 症状の発症と経過

発症 高校2年生の合唱の大会で突然不安発作をひきおこし、その後授業の全般で発作がおこるようになっていった。A子は恥ずかしくて誰にも言えず、とにかく隠したと言う。言えるほど仲の良い友だちもいなかったと言う。

病院 大学入学後1回心療内科へ行って薬が処方されたが、2,3日飲んで止める。

4) 回復過程

相談室 A子は大学の授業で発表があることをきっかけに、切羽詰まって学生相談室を訪れ、以後4年間毎週通った。

大学1,2年生の時……症状を親友に語ることで症状が減少。A子は、大学では大勢の場を避け、友だちは2人しかいなかったが、その2人とは深い話ができた。症状の話しを思いきって初めて他者であるその2人に語り、その辛さを共感され、励まされたと言う。それでも発表等では緊張はする。緊張はするが友だちに励まされて発表などを少しずつ重ねて行く間に、だん

だん不安よりも自信の方が多くなり、気づくと症状が減少していったと言う。

大学3,4年生の時……学科の多くの友だちにも症状を語るようになると、症状が減少、認知も変化 A子は少しずつ自信がつくにつれ、自分から同じ学科の多くの人たちにも働きかけるようになり、励まし合って発表をこなしていった。発表は相変わらずすごく緊張はするが、震えたり、倒れることはなくなっていた。症状が軽くなることで何が一番助けになったのかという筆者の間に友だちの支えをあげ、緊張するのは自分だけではないし、失敗しても悪いことではないと思うようになったと認知の変化を語った。

5) 現在

現在は就職して、30人とか、40人とかの人の前で話をする仕事をこなしている。以前のように不安発作に襲われることはないという。

症例2 自己臭妄想のB男

1) 性別・年齢、B男と筆者との関係

男性、調査面接時の年齢20歳。B男は高校1年生の時に症状が現れた。筆者との関係は、大学に入学した1年生（18歳）のときに筆者が勤務する大学の学生相談室に来室。1年間（2009）相談を担当。その後は別なクリニックの相談室に通い、現在にいたる。調査面接は筆者とのカウンセリングの契約が終了した後の2010.2.4の1回と、その後の数回の短時間面接である。

2) 家族、生育歴

父、母、妹、本人の4人家族。小さい頃からいじめられ、ウジウジして泣き虫で、母から「そういうところが嫌いなんだよ」と言われたりしていたという。「母に愛された思いがない」とB男は言う。実際に愛されなかったかどうかは分からないが、B男の心的世界はそうである。今は偶に母と話すぐらいと言う。妹とは話さない。母と妹は仲がよい。

小学校でも中学校でもひどいいじめにあっていた。とくに中学校では暴力を伴うひどいいじめを毎日受け、心の安まる時がなかったと言う。

筆者が感じるB男の性格は、頑な・我慢強い・従順、神経質・几帳面、傷つきやすい・敏感、友だち関係に情緒的な感じが少ないなどである。

3) 症状の発症と経過

中学で前駆症状 中学3年生のときに既に、会食恐怖と視線恐怖がみられ、今も続いている。

高校で自己臭体験 高校1年生の秋のある日、突然、

教室で臭うことに気づいた。最初は違う人の臭いだと思い、まさか自分だとは思わなかった。しかし隣の席の女子がヒソヒソ声であいつ臭っていると言っていたり、通り過ぎるとき鼻をつまんだりといった他人の仕事から自分が臭うと分かった（関係妄想）。自分でも自分が臭うと分かり、意識し始めると強くなる（妄想的確信）。臭いは緊張とかストレスからだと言う（身体欠陥の確信は薄い）。女子といる時の方が臭いがひどくなるが、女子の方が陰湿な感じがするからだと言う（状況依存性）。臭いは「お年を召した方の特有な加齢臭とか」と言う。大勢の人がいる場を回避したが、臭いを出すことで罪悪感に襲われると言う（加害妄想）。

症状に対する家族の対応 母親の協力で相談所とクリニックへ通う。

病院 B男は高校1年生から現在まで4年間通院しており、薬が処方されている。薬は飲んででも変わらない感じだと言う。

4) 回復と挫折

高校時代、唯一人親友ができ、その親友といるときは症状が出なかった B男は小、中学校時代と虐められ続け友だちがいなかったが、高校時代に唯一人、友だちがいた。高校1年生の時、心の中では友だちも出来ず辛い日々で学校を辞めたいと思っていたある日、そんな自分に彼が話しかけてきた。話すことが苦手な自分はどうして良いか分からずあしらうのが精一杯。それでも何度も話しかけて来てくれ、いつしか彼と話せるようになった。B男は、相手から話しかけてきて、自分の心の壁や人への恐怖心を壊してくれるほどの熱意のある接し方をしてくれないと仲良くなれないと言う。親友はいつも助けてくれ、唯一味方がいるという感じで有り難い。そしてB男は「彼と人のいない廊下で話すときは臭いが出ない」と言う。

大学1年生の時の回復の努力と挫折 大学入学後、筆者の勤務する学生相談室に来室し、1年間、週1回の面接を続けた。筆者はCIの気持ちを十分受け止めるように努めることを最も大切にされた。時にB男の認知の偏りをとりあげることもしたが、あまり受け入れられた感じではなかった。B男の希望もあり、何度も友だちに話しかける練習（ロールプレイ）をしたが1年間1度も話しかけられないで終わった。その後クリニックの相談室へ替わり、クリニックでカウンセリングを現在も継続中である。

大学2年生の時、講義に出席できなくなる 人と一緒に飲食もできず、他人の目も見られず、臭いも気にな

り、講義はみんなから離れて一人ポツンと離れて座り、辛うじて出席していた。しかし、友だちは一人もなく、やがて講義に出ることも辛くなっていった。2年生のとき必死の努力をして1度だけ自分から他者に話しかけたが、実らなかった。ショックが大きく落ち込んでいった。

5) 現在の状況

今、B男は、友だち関係にも、大学を通うことにも、アルバイトにも行き詰まり、抑うつ状態になっている。

3 考察

以上の2つの症例を次の観点から考察を加えた。

1) A子とB男の症状をどう理解するか、その背景はどのようなものであるか。

① A子とB男の症状の異同…… A子とB男の症状はどのようなものか。ICD-10,DSM-IV-TRの臨床像、診断基準からはどう診断できるか。わが国には対人恐怖に関する実り豊かな研究成果があるが、その観点からはどう理解できるか。

② A子の不安発作およびB男の自己臭の背景はどのようなものか、家族歴、生育歴あるいは生活歴はどのようなものか。発症前の性格はどのようなものであったか。

2) 2人の回復過程の異同の比較

① 2人に共通して「回復の始まり」が見られたが、それはどのような内容であり、どのようにして始まったものか。友だち関係との関わりはどのようなものであったのか。

② 2人は、しかし、その後の回復過程が明暗を分けてゆく。A子は回復の道を歩むが、B男はますます症状を強め、抑うつ状態となっていった。それはどのような内容であり、どうしてそうなって行ったのか。友だち関係との関わりはどのようなものであったのか。

3) 最後に A子とB男の発症のしかたとその後の回復状況の違いの意味を再考し、「社会(交)恐怖」と「重症対人恐怖」の本質的違いを考えるとともに、それが周囲他者、とくに友だち関係とどう関わっているのかを再度考察した。

IV 研究の課題と発展

今回は対人恐怖の2事例の比較研究を行ったが、さらに多くの対人恐怖の事例研究を重ねること、および、対人恐怖以外の他の青年期の精神的疾病の事例研究を

重ねることを通して、思春期・青年期危機と言われる青年期中期の自我の確立過程での危機的狀態を呈した若者が、周囲他者、とくに友だちとの関わりの中でその後いかにして立ち直っていくか、その回復過程の心理的变化を質的に検討し、青年期の臨床心理学的援助の一助としたい。

引用文献

- 土居健郎 (1958) 神経質の精神病理 - 特に「とらわれ」の精神力学について. 精神神経学雑誌, 60;733-744.
- 土居健郎 (1960) 「自分」と「甘え」の精神病理. 精神神経学雑誌, 62;149-162.
- 笠原嘉ら (1972) 正視恐怖・体臭恐怖 - 主として精神分裂病との境界例について. 医学書院.
- 笠原敏彦 (1987) 対人恐怖症の外来精神療法. 臨床精神医学, 16 (6) ;829-834.
- 笠原敏彦 (1995) 対人恐怖と社会恐怖 (ICD-10) の診断について. 精神神経学雑誌, 97 (5) ;357-366.
- 小林隆児 (2010) 関係からみた発達障碍. 金剛出版.
- 小林隆児 (2010) メタファーと精神療法. 精神療法, 36 (4) ;79-88
- 小出浩之 (1980) 分裂病者ならびに思春期妄想症者にとっての思春期. 臨床精神病理, 1;143-155.
- 近藤章久 (1970) 対人恐怖について - 森田を起点として. 精神医学, 12 (5) ;382-388.
- 村上晴彦 (1980) 思春期妄想症 - 確信を支える三つの体験的契機. 臨床精神医学, 9 (7) ;579-584.
- 永田利彦 (2009) 社交不安障害の概念の拡大と対人恐怖症. こころの科学, 147;32-36.
- 中沢晶子 (1963) 体臭を訴える病者の心性について - 人間学的観点からの一考察. 精神神経学雑誌, 65;451-469.
- 小此木敬吾 (1999) 精神分析から見た思春期心性. 思春期青年期精神医学, 9 (2) ;131-144.
- 植元行男ら (1967) 思春期における異常な確信的体験について (その1) - いわゆる思春期妄想症について. 児童精神医学とその近接領域, 8(3);155-167.
- 山下 格 (1977) 対人恐怖. 金原出版.